

# 兒童心理學 (第五講)

牛 島 義 友

## 精神發達の段階

前數回に於て精神發達の條件として、環境や性別の問題を説いたが、今回からは精神發達自身を問題として行きたい。其の爲に先づ精神發達の輪廓を示し、發達の骨組なるものを明かにしておきたいと思ふ。

子供の心は毎日少しずつ成長してゐて、其間に段階を立てる事は困難な様ではあるが、大局から見ると、相當顯著な段階を區別する事が出来る。此段階を學者等は色々な名前と呼んで居るが、私は其の主要特徴から、身邊生活、想像生活、知識生活、精神生活、社會生活時代と言ふ名稱を用ひて居る。又其の精神發達の原理としては主觀と客觀との辨證法的發達と言ふ事を考へてゐるが、是等について簡単に説明しよう。

身邊生活時代 先づ生れてから三、四年間の子供の生活

を見るに、其の生活の範圍は極めて狭く、其のなす處は主として日常生活的なものである事が特に目立つてゐる。

先づ子供の生活する空間を考へてみるに、最初の數ヶ月は寢具の上に横になつて居るだけで、時に他處に連れて行かれる事があつても、それは全く受動的であつて、自身で積極的に動き出す事はしない。否目の前にあるガラ／＼に手を出して掴む事さへしないのである。五ヶ月頃から手を出して掴む様になれば嬰兒の生活空間は急に擴大したと言つてよいし、自ら這つて行つて取る様になれば、更に其の生活空間が廣くなつたと言へる。併しそれでも彼等の動く範圍は部屋の中、家の中であつて、極めて狭い。二三歳の子供でも一人では中々他處へ遊びに行かうとしない。家の庭か、前の路に一寸出るが、直ぐ親の居る家の中に歸らうとする。

次に時間的に眺めても、子供の生活は短く、現在の、

瞬間的な生活を送つてをる。眼前にある玩具やお菓子を見て欲しがつたり、お腹が空いたさか、おしつこをするさか、睡いさか其の時々の要求に驅られて行動してをる。子供は昨日の事を想ひ出したり、明日の事を豫想する様な事は出来ない。前日に餘程變つた事、例へば動物園に見物に行つた場合でさへ中々其事を想ひ出して話しをする様な事はしない。まして去年の事や、來年或は將來の事を考へるならん言ふ事は満三歳以下の子供には考へられない。

斯の様に幼兒達は狭い家の中で生活し、其の時々に興味や要求のまゝに生活してゐる。即ち其の生活範圍は極めて狭い言ふ事が出来る。此の狭い世界で何をしてをるか言へば毎日々々飽かずに同じ事を繰返して居る。即ち朝起きてから一騒ぎして食卓につき、遊んだり、お汁をこぼしたりし乍ら食事をさり、次には玩具を次々こ一通りいじつて遊び、お八つ、お晝食、午睡、遊戯も同じ様な事をして一日送つてをる。其の間に何處か排泄の行事で親の手を焼かせる。即ち彼等の生活は自分の生存に直接必要な食事、排泄、睡眠と遊びに終始してゐる。斯る日常的な自分一個の身邊的な生活が此の第一時代の大きな特徴である。

想像生活時代 處が満四歳頃になるさ急に生活範圍が擴大して來る。大概の子供は一度位迷子になる事があらうが、其の年齢は四五歳頃が多い。今までは家の周圍でだけ遊

んでゐたのが、少し遠出する様になる。隣の通りまで遊探險に出かけたり、そこで何か變つたもの、紙芝居やチンドン屋等を見るさ、面白さの餘り其の跡をつけ、遂に迷子になつてしまふ事がある。即ち彼等の生活空間が擴がつて來た爲に迷子にもなるのである。

又此の頃の子供は友達と遊ぶ様になる。今までは母や祖母或は兄弟だけで遊んでゐたのが、近所の子供とさきりに遊び度がるし、又友達の家に出かけて行つて時間を過ごす様になる。之も亦彼等の生活範圍の擴大を意味する。

更に又彼等の時間的世界が廣く遙かになつて來る。今までは目の前にある玩具さか犬さかによつて興味が惹起されてゐたのが、この頃になるさ、眼前にないものについても色々想像して楽しむ様になる。此の變化の主な原因は言語の習得にある。言葉は不思議な魔力を持つて居る。何も無い壺から色々なものを引出してみせてくれる。言葉を使はない嬰兒は犬が目の前に現れないさ、犬について何か聯想したり、想ひ出す事は無い。處が言葉を解する様になるさ、犬と言ふ言葉を聞いただけで犬について想ひ出し、色々考へる事が出来る。現實に犬が居なくても自由に想像する事が出来る。即ち言葉は現實の制約から離れて、自由に觀念の世界、想像の世界に舞ひ上る事を可能にする。初の内は言葉も不自由であり、従つて大した想像も動かない

が、満四歳位にもなるに、其の言語生活は極めて豊富になり、自由に色々な話をする事が出来る様になる。斯うなるに其の想像の世界も極めて廣いものになって来る。此の頃の子供はお話をしきりに聞き度がる様になる。それまでは子供にお話をしてやらうと思つても、語彙が不足してをる爲に仲々話が困難であるし、又少し善い話は全然理解出来ない。處が此の頃になるに、大人のお話も相當に理解出来る、お伽噺なら夢中になつて傾聴する。

或は又子供は一人で色々な相手を想像して遊ぶ様になる。例へばお人形に色々話しかけて、お客様ごつこをしたり、想像の友達を作つて、一人言を言ひ乍ら遊んだりする。又一般に此の頃の子供は何々ごつこ言ふごつこ遊び、模倣遊び、想像遊びをして楽しむ。

是等のお伽噺や模倣遊びに就ては現實世界の約束を無視して、自由に想像の翼を擴げておる。例へば人が動物に話しかけたり、否人が動物になつたり、動物が人間と同じ生活をしたりする事も出来る。斯る想像の世界に生きておるのが、此の頃の特徴である。

前の身邊生活の時代は現實の要求に従つて泣いたり、喜んでたりしてゐたのが、今や觀念の世界で遊ぶ様に變つて來た。即ち前の世界は客觀の世界であつたのが、主觀の世界に轉じて來た。而して之は一つの發展である。何故なら、

今までは狭い不自由な生活、現在の、瞬間的な生活であつたのが、廣い世界に出て、自由に色々な世界を探險し、駆け廻る事が出来る様になつたから。

知識生活時代 想像生活は一段進歩したものと云つたが、之が完全な態度でない事は言ふまでもない。非現實的な主觀的な態度は正しい現實の認識や、解決は與へられない。空を鳥の様に飛んでみたいと言ふ慾望が起つた時に、想像的態度では背に羽が生えて飛び立つたを考へたり、帯にまたがつて呪文を唱へるを空を飛べたりする。斯る空想的な解決の仕方では物事は實際には解決されない。空を飛びたければ物理的理法にかなつた飛行機を製作して、それを一定の方法で操縦しなければならぬ。即ち物事を解決するには空想や自分一個の想像ではなしに、現實に則した科學的方法によらなければならぬ。即ち想像生活はもう一段の發展をしなければならぬ。

此の發達を促すものは學校教育である。子供自身でもお伽噺が長く信用は出来なくなる。帯にまたがつて空を飛べなんて實際に出来るのだらうか疑問を持つ様になるであらうし、學校の先生は更に、そんな事は出来やしない。お伽噺なんて嘘の話だ、架空の世界だを教へ込む。此の學校の知識教育によつて子供の興味は空想の世界から、現實の世界に呼び戻される。此の現實の世界と言ふのは自動車が

疾走したり、飛行機が飛んだり、軍艦が戦争をしたり、或は鳥が卵を生み、雛が育つて行く自然界、即ち理科の世界、自然科学の世界である。子供達は自然界に於ける驚異す可きもの、素晴らしいものを異常な興味を持つて眺める様に變つて来る。彼等は何故電車が走るかを知り度がるし、自分でも一つ動かしてみたいとの強い熱望を懐く様になる。玩具の電気機關車を組立てるのに夢中になつたり、ゼンマイ仕掛をのぞかうとして壊してみたり、昨今の様に斯る玩具が無くなるこゝ、圖解された繪本等を熱心に讀む様になる。其の他動植物の採集等にも興味を湧く、子供は元來トンボ捕が好きであるが、若し適當な指導を受けるこゝ立派な昆蟲採集をやる事さへ出来る。

其の他讀物等も科學讀物を好む様になるし、物語や小説にしても自動車や飛行機を操縦して偉い事を爲出かす冒險小説等を愛讀する様になる。

斯る知識生活は國民學校三年頃から始まり中等二年頃まで續いておる。

又知識生活時代の他の特徴は學校に於ける社會生活である。子供達だけの世界は案外に眞剣な、生存競争の激烈な世界である。保姆や先生達は子供を保護し、指導して下さるが、子供同志はお互に競ひ合ひ、仲良く遊んでるかと思ふこゝ、たちまち喧嘩を始め、其の場合には無遠慮に相手の

缺點をあげて悪口する。吃りだこか目からだこ言つたり、或は親の低い職業を輕蔑したり、子供のやつた失敗を無遠慮に暴露したりする。斯る目に會ふこゝ子供は非常にくやしがり、負けるこゝ知り乍ら相手に掛つて行つたり、氣の弱い子供はすつかりいぢけ込んでしまふ。

此の子供同志の社會生活、力の相剋によつて彼等の性格が構成されて来る。即ち前の時代の自己中心的な生活、想像の友さ楽しく過ごすのではなく、現實的な社會生活によつて其の性格が鍊成されて来るのである。

斯る意味で知識生活時代は現實的な時代、客觀的な時代であるこゝ言ふ事が出来る。

精神生活時代 さて以上で子供が大人になつたこゝ早合點されては困る。幼児はやうやく少年になつたばかりである。知識生活は立派な生活態度の様ではあるが、未だノ、何か物足りない。がさ／＼した生活である。電車の知識が増し、巧に操縦出來たこゝして、それが何にならうか、高々電車の運轉手でないか、之で人生の發達が停つたこゝしたら人生の意義も疑はしくなる。さうだ此の人生の意義等に就いて思索し、煩悶する時代が次に現れる。

今まで子供は専ら肉の目で自然界の驚異をのみ眺めてゐた。而も教師から教へられ、書物で讀んだ知識だけで見つてゐた。何處にも未だ自分こゝ言ふものが無い。凡ては借物で

ある。自分の知識、自分の考へ方が必要になつて来る。自然の事を色々勉強する眞の目的は、之によつて自分の世界觀を樹立する爲でなければ意味がない。併し世界觀の樹立の爲には自然界のみを見てたのでは餘りに偏狭である。何か重大な見落しがある事に氣付いて来る。勿論子供達には斯る論理を追つて考へておる譯ではない。併し何か物足りなさが感じられて来る。少年達は生理的成熟の結果、親にも教師にも簡單に打開けられない心配事を持つ様になる。又精神的成熟の結果、もう子供でないのだ。大人扱ひにしてもらひたいものだとの要求が起つて来る。然るに大人達はまだ子供のくせにさか、此の頃は生意氣になつて來た等と評して、まごもに取上げてくれない。それで少年達は此の氣持を理解してくれる友、語り合ふ事の出来る親友を求めて来る。此の友への惚れ、満されぬ淋しさ、孤獨の憂愁、友愛の歡喜等を経験する様になる。斯る世界は凡て肉の目でなく、心の目で見られる世界であり、而も前の自然界に比して數層倍心をゆり動かし、魂を昂揚させるものである事に氣付いて来る。彼等は精神の世界、人格の世界を發見したのである。

斯くて彼等は今まであんなにも興味を持つてゐた理科の書物も見棄て、しまふ。其の代りに友情を描く物語、人生を説く小説、或は宗教、哲學を求め、藝術に慰を得んむ努

める様になる。

又其の社會生活も少年期の様に大勢の者互に張り合ふ生活ではなく、群衆から離れた孤獨の世界、心から信賴出来る少數の友とのみの親愛の交り、愛情の世界へ變化して来る。

斯る青春の憂愁と歡喜の世界こそ青年期である。而してそれは主觀に沈潜し、自我を發見する時代である。

社會生活時代 青年期は如何に美しいものであるにせよ、併し尙未完成の時代である。自我を發見出來ても未だ社會を認識してゐない。餘りに唯我獨尊的である。眞の人生、與へられた分を守り、少しでも國家、社會に貢獻するには人は主觀の象牙の塔から街頭に出なければならぬ。詩の世界を高踏的に彷徨ふ代りに、人々協力して鳥を作り、仕事をし、子供を生み育て、行かねばならない。職業とか結婚等の社會的現實的生活に入つて始めて人として完成して来る。